

EXHIBITION - talk

情報化時代に先駆けたすごい男、ウメサオタダオに迫るin民博。

小説家・柴崎友香が知的生産のバックヤードを探検！

「整理術」に「仕事術」、「ライフハック」、「ナレッジ・マネジメント」……書店のビジネス書コーナーで花盛りの、「知識/情報管理テクニク」。今や定番テーマともいえるこうした分野をすでに40年以上も前に開拓し、スーパーロングセラー本『知的生産の技術』を生んだ梅棹忠夫は、ビジネスマンとはかけ離れた職業、「民族学者」だった。いったいなぜ世界の辺境を探検・調査するフィールドワーカーが「知的生産技術」を生んだのか？ その秘密を探るべく、彼の膨大な業績を振り返る回顧展の開催準備真っただ中の国立民族学博物館を訪れたのは、小説家の柴崎友香さん。同博物館に「子供の頃から数十回は訪れてきた」という、筋金入りの民博ファンを自任する彼女が、本展のために、梅棹が残した遺品や資料の整理を行う小長谷有紀教授を案内役に、展示直前の梅棹アーカイブに分け入り、探検・調査へ向かう……。



学生時代に書いたスケッチ。画家になりたいかっただけあって、相当な腕前。色見本付きノ

た「分類するな、配列せよ」が見事に実現されていますね。

小長谷 先生はいつも「大事なものは検索」とおっしゃっていましたから、あらゆる資料は機械的に並べることを実践しておられました。だからこそ後年、目が見えなくなられてからも、スタッフに「あれを取ってきて」と言えば、誰もがその資料を探して持ってきてくることができたんですね。



博物館の図書室、資料庫にも通していただく。「あいうえお順」徹底の整理が圧巻。



特注のファイルを使って、著作すべてが「あいうえお順」に区分けされた鉄壁の棚。

今回の展示にあたり発掘さ

の時の年賀状から民族学の調査研究の際のスケッチ、読者からの反響の手紙まで、あらゆるものを保管されていたんですね。柴崎 そのスケッチがまたものすごく詳細な記録で、驚くほど正確に書いてありましたね。

小長谷 そうなんです。彼の一番すごいところは、著書などに書いておられることはわしづかみに「インプット」の方はものすごくディテールが細かいということ。とてつもなく繊細に入れて、大まかに出す。複雑なことを自分の中で咀嚼し、呻吟して人にわかりやすく伝えることをやっておられた。だから、大ざっぱに見えるその裏にあるものがすごい。今回の展示では、そういうところを見てほしいですね。

頃から民博に来ていますが、ここに来ると、普段見えていないものの下に潜んでいる未知のものがたくさんあるんだということが強く感じられて、もっと知りたい、調べてみたいと思うんです。

小長谷 梅棹先生もそういう好奇心を一番大切にされていたと思います。もちろん、整理することにかけては冷徹なまでに合理的。だけど、「知的生産技術は能率のためではない」と書いているんですね。あくまで、自分が考えたり発見するためのものなんです。



万博公園内にそびえる、梅棹とも親交の深かった岡本太郎の「太陽の塔」の前で。

柴崎 それってこの民博にも言えますよね。表に出ているのは氷山の一角で、その裏には長い間の研究や多量の収集物がある。子供の頃から民博に来ていますが、ここに来ると、普段見えていないものの下に潜んでいる未知のものがたくさんあるんだということが強く感じられて、もっと知りたい、調べてみたいと思うんです。

柴崎 その意味では、『知的生産の技術』を読んだ読者からの感想の手紙も面白かった。どれもただ「良かった」で終わってないんですね。中高生からおじいさんまで、あらゆる読者が「僕もこんなこと考えました」とか「もっとこうしたらいいのでは」とか、自分も考えているところが面白くて、表面的な形じゃなくて、考え方の部分で影響を与えているんですね。



50年超の歴史？ キャビネットに収められたカード類。後から見てわかる整理は基本。

小長谷 梅棹先生は初期に「アマチュア思想家宣言」と書いていて、思想は大学教授だけが使えるもの

の考えていた「知的生産」ですよ。柴崎 梅棹さんに答えを求めると、じゃなくて、みんなが常に自分で考え続けて、何かを発見して、また誰かがそれを乗り越えていく。すごく動的なもの。常に更新されていくところもインターネットの。小長谷 そう。常にユーザー視点だから、その考えは普遍性がある。柴崎 今、私たちの生き方の参考にも絶対なるって思いました。

柴崎さんが釘づけ、アーカイブのお宝。

- 1 かなカナタイプライター。一台でカナ文字、ひらがな、ローマ字が打てる。縦書き電動。梅棹が関わりブラザー工業が開発。商品化はされていない。「世界に1台とは貴重ノ」
- 2 ござね。小紙片に短く要点を書き、配列し、端をステープラーで留めてそのまま文章に仕上げていく方法として提唱。青年時代のスケッチ。右は自宅の部屋。左の絵は白頭山探検の時のもの。「針葉樹の形がすごく的確ですがです」
- 3 フィールドワークで愛用したカメラ。数万点の写真を残す。写真に日付が入る機能のカメラを提案したのも彼とか。
- 4 寄せられた手紙もファイルに。彼の提唱に倣い、カナ打ちだ。アラスカでの犬樺研究の際に書いたメモ。「すべての絵が紙のサイズに合わせ綺麗に縮尺が合っているのがスゴイ」

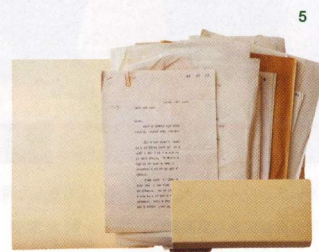
開催中/ウメサオの先見性と知的的好奇心に驚く展覧会。

国立民族学博物館を創設し、初代館長を務めた梅棹忠夫の足跡を辿りながら、思想の先見性や実効性を改めて発見できる展覧会。名著『知的生産の技術』（1969年、岩波新書）ができるまでの、カード、ござね、直筆原稿などの初公開資料のほか、知的生産のための資料や道具（アーカイブズ資料）をおよそ1,000点公開。また、著作集全22巻を主に取り上げ、どのような観察記録から生まれたものが復元され体験できる。彼の知の懐でしばしの充電を。

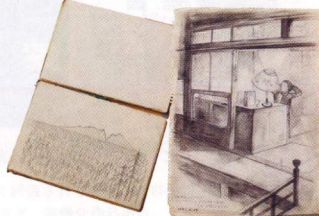
特別展『ウメサオタダオ展』は～6月14日、国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博記念公園内 ☎06-6876-2151）特別展示館で開催中。10時～17時（入館は～16時30分）。水曜休（5月4日は開館）。http://www.mnpu.ac.jp/special/umesao



photo / Kaoru Ogino



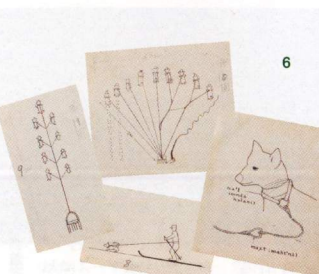
5



3



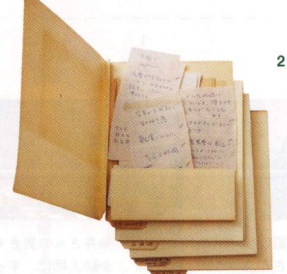
1



6



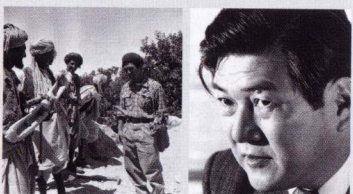
4



2

ウメサオタダオってどんな人？

梅棹忠夫/民族学者、比較文明学者であり、国立民族学博物館の創設者。1920年生まれ。京都帝国大学理学部卒業。学生時代から登山を始め、アフガニスタン、東南アジアなどで民族学の調査を行う。京都大学人文科学研究所教授を経て、国立民族学博物館初代館長に就任（93年退任）。86年に失脚するも旺盛な著述活動を続ける。2010年没。



民族学者として、各地の探検・調査に参加。写真左は1955年のカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊に参加した際訪れた、アフガニスタン、ジルニー村で。

『知的生産の技術』

1969年の初版発行以来、現在までに80刷を超えるほどのロングセラーであり、その後の情報化時代を先取りし、情報管理術を広めた名著。本書で情報整理に用いることを提唱したB6サイズの情報カードは「京大式カード」と呼ばれ、いまだ使われ続ける大ヒットになっている。岩波新書。



小長谷有紀

こながや・ゆき/国立民族学博物館・民族社会研究部教授。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。専門は文化人類学、文化地理学、モンゴル・中央アジアの遊牧文化。民博ファンの柴崎さんと旧知の仲であり、対談の経験もある。

柴崎友香

しばさき・ともか/1973年生まれ。2000年、『きょうのできごと』でデビュー。07年、『その街の今は』で第23回織田作之助賞、第57回芸術選奨文部科学大臣新人賞、10年、『寝ても覚めても』で第32回野間文芸新人賞を受賞している。